

以下の問題〔I〕は必須問題です。
全員が解答してください。

〔I〕 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

G・W・F・ヘーゲルが述べたように、人はまずは他者からのシヨウニン^(注1)を求め、さらには他者への優越を求める。シヨウニンへの欲求、さらには優越への欲求が人を突き動かしている。社会秩序とは、このシヨウニン願望・優越願望によって作り出されて、またそれによって変動させられてゆく。そこで当然ながら競争が生じる。それは社会的な地位やイシン^(注2)をめぐる競争であり、「ポトラッチの原理」とは、まさしく、この地位やイシンをめぐる激しい競争^aであり競争であった。

ここでは、人々は、社会的な地位や名誉やイシンといった「社会的財」に無関心ではおれないであろう。高い社会的地位や名誉を得ることはもともと「類いまれなもの」なのだ。A、この「類いまれなもの」を求めて、欲望は相互に模倣しあう。他人のほしがっているモノを人はほしがらる。

¹ 社会的地位や名誉に本当に価値があるのかどうかということでは問題とはならない。人は、他人がそれを求めるからというだけで十分にそれを求めるのである。優越とは、他人が求めるものを手に入れることだからだ。かくて欲望は相互に模倣しあう。

生活の必需品については、ある程度、自分が必要なものだけを求めるかもしれない。しかし、生活の必要という「必需財」を超えた「社会的財」に関わる部分においては、「われ関せず」というわけにはいかない。欲望そのものが社会的に形成されるのだ。

ゲオルク・ジンメルは『貨幣の哲学』において、「欲望」は距離によって生み出される、といった。B、自給自足的に

必要なものをいつでもチヨウタツできるとすれば、誰も特にそれを「欲望」しない。あるモノについて他者と競合するからこそ「欲望」が発生する。対象との間に障害があり、距離ができるからこそ、その対象に対する「欲望」が発生するのだ。

だから、他者がほしがっているモノをほしがるといふ相互模倣的な欲望は、それ自体がいつその「欲望」を生み出すことになる。ここにはどうにもならない「距離」ができるからだ。こうして相手の行動を模倣することで「欲望」が作り出されるのである。

もつといえ、このことを次のようにいうこともできよう。

人は、そもそも「自分本来の欲望」などというものを持っているのだろうか。いかなる近代的な合理的人格の持ち主であれ、自分が何者であり、何をほしがっているかを完全に知っている者などいない。人は、自分が何者であるか、ヨウイ^(注3)には答えが出せないのと同様に、自分が欲しているものが何かなどわかりはしないであろう。

だから本当のところ、欲望²の対象は、決して確かなモノではなく、不特定で不確定な何かといわねばならないであろう。

われわれは、確かに「何か」を欲望する。だけれども、それが何かは確かにはわかっていない。だからこそ「他者の欲望」を模倣しようとするのである。「欲望」はあるものの、その意味内容は空白であるような空虚な部分に、われわれは「他者の欲望」を持ち込むのである。「空白」の欲望のなかに「他者の欲望」を代入する。空白であるような、欲望の向かう対象に、われわれは「他者の欲望」を借りてきて代補^bするのだ。

こうして、欲望の模倣が生じ、それは社会的な名誉や地位や虚栄^cをめぐる競争的な模倣的競争(エミュレーション)をもたらす。

それは、決して、あるゴールがあつて、そのゴールに向けてそれぞれがそれぞれのやり方で順位を競う競争(コンペティション)ではなく、相互的模倣がゴールなき無限の競争を自動的に生み出してしまふ模倣的競争(エミュレーション)なのである。

これが「ポトラッチの原理」だ。どうしてこの種の「原理」が出てくるのか、それは誰にもわからないであろう。同じように、

どうして高価な真珠のネックレスが高い地位を表し、ブランドもののバッグが虚栄心を満足させるのか、などといっても誰もわからない。ここでもだいたいなことは、特定の財が社会的な名誉を与え、虚栄心を満足させるということではなく、それ自体が象徴作用における「過剰性」の表現になっているということなのだ。

着心地の悪い、しかもどう見ても機能的どころではないきらびやかな衣装を着ている人は、それをほしいと思っているのだらう。だが、個人の主観を離れて「無意識のレベル」まで少し降りてみれば、そのモノ自体を「個人的に」欲しているわけではない。二〇世紀初頭のユウカン階級の婦人がきついコルセットを本心から欲していたとは考えにくい。ただ他人がそれを欲するから、上流階級の人々がそれを着用するから自分も欲するのである。

ここでは、お互いに、力や地位や富などを表象する記号としての贅沢品、奢侈品が代補されてゆくのだ。C 「欲望」を相互に交換するコミュニケーションが行われているのである。欲望は自らの生活の必要によってあらかじめそこにあるのではなく、相互の交換のなから、すなわち「模倣」によって生み出されるのである。

かくて、われわれは、先にも述べたように、生活の必要や個人の事情によってどうしても必要とされる「欲求(necessity)」と、社会的な次元を持ち、相互模倣によって生み出される「欲望(desire)」を区別することができるだろう。

確かにこれは程度問題であり、どこかで線引きできるという種類のものではない。だが、一方では「欲求」へ向かう軸があり、他方には「欲望」へ向かう軸がある。そしてそれはおおよそ「有用性の原理」と「過剰性の原理」に対応している、と見ておくことができる。

こう考えれば、「欲望」は「過剰性」によって生み出される。そしてひとたび「欲望」が生み出されれば、財貨は「稀少」になる。相互模倣の「社会的財」を求める欲望が強まれば強まるほど財貨は「稀少」となる。貴重品はますます貴重なものとなる。

あらかじめ財宝やきらびやかな衣装や豪邸やらに対する欲望があって、そこに稀少なものとしての貴重品があるのでなく、地位や名誉や虚栄といった相互模倣の社会的価値が形成され、それが「貴重なもの」を生み出すのだ。ここに「稀少性」の概念が生まれる。⁴ 「稀少性」は、「過剰性の原理」のなかでこそ生み出されているのだ。

しかもそうになると、相互の欲望が競合するこの稀少な財貨を手にするには多額の「貨幣」が必要となるだろう。「貨幣」こそが、ジンメルという「距離」を測るものとなる。欲望は、それを手にするのに障害があるからこそ発生するのであり、この障害、つまり「距離」が大きければ大きいほど欲望は大きくなる。だからこそ、上層階級の贅沢品といった階層的シンボルは、その「距離」が意識されればされるほど、大きな価値を持つことになるのである。

と同時にまた、実は「貨幣」こそがこの「距離」を生み出すことに注意してもらいたい。

貨幣を手に入れなければほしいものは手に入らない。したがって、模倣的な欲望によって他者と同様のものを手に入れたいのなら、より多くの貨幣を手にしなくてはならない。かくて「貨幣」こそが、自分と対象との間の「距離」を生み出す。

いいかえれば、「貨幣」こそが「欲望」を作り出すといってもよい。「距離」の大きさは「貨幣」によって測定されるとすれば、より多くの貨幣を必要とする対象ほど「距離」が大きくなるだろう。同時に「欲望」もより強度になるだろう。そして結果としてここに「稀少性」がもたらされるのだ。

かくて資本主義の動因の一つのキャラクターが明らかとなるだろう。

それを改めて述べておこう。

X

ここでわれわれは一つの重要な結論に達することになる。それを次のようにいっておこう。

「過剰性の原理」と「稀少性の原理」は対立するものではない。そうではなく「過剰性の原理」が「稀少性の原理」をもたらしするのである。

(佐伯啓思『経済学の犯罪——稀少性の経済から過剰性の経済へ』による)

(注1) G・W・F・ヘーゲルドイツの哲学者(一七七〇—一八三二)。弁証法や観念論を体系化し近代哲学に大きな影響を与えた。主著には、『精神現象学』、『論理学』などがある。

(注2) ポトラッチー北米太平洋岸の先住民社会に広く見られた贈答の慣行。

(注3)ゲオルク・ジンメル、ドイツの哲学者、社会学者(一八五八―一九一八)。社会学の草創期の主要人物として、マックス・ウェーバー、エミール・デュルケムなどと並び称される。『貨幣の哲学』は彼の近代社会認識を示す代表作の一つである。

問一 本文中の空欄 A、B、C に入る最も適切な語を、次の各群の①～⑤からそれぞれ一つずつ選べ。

- | | | | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|-----|---|---|------|---|---|-----|---|------|---|---------|
| A | 1 | ① | そして | 2 | ② | ところが | 3 | ③ | まず | 4 | たとえば | 5 | にもかかわらず |
| B | 2 | ① | しかし | 2 | ② | むしろ | 3 | ③ | つまり | 4 | ただし | 5 | あるいは |
| C | 3 | ① | 一方 | 2 | ② | しかも | 3 | ③ | だから | 4 | すなわち | 5 | それならば |

問二 本文中の()線 a「競覇」、b「代補」、c「虚栄」の本文中の意味として最も適切なものを、次の各群の①～⑤からそれぞれ一つずつ選べ。

a…「競覇」 4

- ① 同じ目的に向かってそれぞれがそれぞれのやり方で順位・勝敗を競うこと。
- ② 暴力等を用いても相手の命を奪うまで徹底的に戦うこと。
- ③ 他を支配するための権力を誇示するために戦うこと。
- ④ 何らかの目的や要求を達成するために、ともに争うこと。
- ⑤ 相手を上回る地位や財力をもっていることを示すために競うこと。

b…「代補」 5

- ① あるものの代わりにそれに見合う別のものを使うこと。
- ② 自分で具体的な内容を満たすことができず、他のもので補うこと。
- ③ 与えた損失や欠損部分を埋め合わせること。
- ④ あるものに足りない部分を付け加えること。
- ⑤ 本来あるものに代わって他のものが役割を遂行すること。

c…「虚栄」 6

- ① 他人を見下して、思いあがった態度をとること。
- ② 自分で自分に関係のある物事を誉めて、他人に誇ること。
- ③ 実際以上に自分が優れていると思込んで、得意になること。
- ④ 自分を実質以上によく見せようとする事。
- ⑤ 周囲に対して偉そうに振る舞ったり、失礼な態度を取ること。

問三 本文中の——線1「社会的地位や名誉に本当に価値があるのかどうかなど」ということはここでは問題とはならない」とあるが、なぜか。その理由として最も適切なものを、次の①～⑤から一つ選べ。 7

① 社会的地位や名誉は、もともと「類いまれなもの」なので、「類いまれな」人たちに限られた問題だから。

② 社会的地位や名誉は、誰にとっても価値があるということは明らかだから。

③ 社会的地位や名誉は、多くの人々が求めるからという理由で、人に求められるものだから。

④ 社会には社会的地位や名誉以外にも価値あるものが存在するから。

⑤ 社会、文化によって価値あるものは異なるから、自分にとって価値あるものを求めればよいから。

問四 本文中の——線2「欲望の対象は、決して確かなモノではなく、不特定で不確定な何か」とあるが、なぜ「不確定」なのか。その理由を説明した次の①～⑤のうち、筆者の主張に合致しないものを一つ選べ。 8

① 人は社会的財に無関心に生活することはできないので他の人と同様に社会的財を求めざるを得ないが、実際にそれが何であるかはわかっていないから。

② 人は自分自身が何者であるかを理解することが困難であるのと同様に、自分が何を欲しているのかを認識することも簡単ではないから。

③ 欲望は、他者と競合するからこそ生まれ、やがてそれはゴールのない無限の競争を次々に生み出してしまふから。

④ 自分の欲望は、「他者の欲望」を模倣しようとすることによって生み出されるため、自身がどのような対象を求めているのか、追究されなくなるから。

⑤ 生活に必要なものが満たされていけば、特に欲望するようなモノはないので、欲望の対象を特定したり確定することはできないから。

問五 本文中の——線3「象徴作用における「過剰性」の表現」とあるが、「過剰性」の具体例として適切ではないものを、次の①～⑤から一つ選べ。 9

① 有名なプロスポーツ選手が履いていたものと同じ型のレアなシューズを履くこと。

② メディアで話題になっている外国製の高級腕時計を身につけること。

③ 高級ブランド主催のパーティーで最新の洋服を着ること。

④ 通勤や通学に便利な立地が良いタワーマンションの最上階に住むこと。

⑤ 環境破壊や動物保護などの社会問題に取り組んでいる企業の製品を選択すること。

問六 本文中の——線4「稀少性」は、「過剰性の原理」のなかでこそ生み出されている」とあるが、どういうことか。それを説明した次の①～⑥のうち、筆者の主張と合致するものを二つ選べ。なお、解答の順序は問わない。 10 11

① 欲望は相互模倣によって生み出されるため、社会を構成している多くの人がこれまで以上に限られた資源や財を確保しようとする、より一層激しい競争が生じ、その資源や財は相対的に獲得することが困難になり、貴重なものになるということ。

② 実際にはたいした価値がないものでも、人びとの間に広まると、それをもっている人ともっていない人の間には差異が生じる。他の人に遅れをとりたくないという心理が働き、本当は欲しくもないものでも購入する人が多くなるが、すぐに新しいものが出てきて、また不安に駆られることになるということ。

③ 人は消費を通して自分の社会的地位、さらには個性を示そうとするが、欲望の対象である貴重とされるものは限られており、それらを手に入れるために人よりも多くの財貨を獲得しようとするより一層激しい競争に挑むということ。

④ 欲望は個人的な性格や生育環境、生きた時代や価値観によっても異なる。とくに、他人のモノを欲しがると傾向の強い人が他の人よりも優れていることを示すために貴重なものを手に入れようとすると、そのものの市場での価値が低下するという事。

⑤ 生命や最低限の生活の維持のために必要とされる欲求に対して、欲望は他人がもっているモノや他人が欲しがっているモノを必要以上にもちたいという強い気持ちから生じる。しかし、欲望は満たされることがないため、欲望が強まる程、その稀少性が増すことになるということ。

⑥ 人は手に入れることが困難であるからこそ社会的地位や名声を得ようとしたり、貴重とされている豪邸やきらびやかな衣装や宝石を他の人よりも多くもとうとするということ。

問七 本文中の——線5「貨幣」こそがこの「距離」を生み出す」とあるが、どういうことか。その説明として最も適切なものを、次の①～⑤から一つ選べ。 12

① 個人的に価値がないと思っていたモノにも、それを手に入れるための困難さを示す価格が貨幣によってつき、社会の中でどの程度価値があるのかが分かるということ。

② 貨幣によって自分と対象との距離が生み出されるので、距離が大きければ欲望は弱化してしまうということ。

③ 貨幣は通常、金属や紙でできていてそれ自体に意味はないが、いったん流通するとそれ自体が価値をもつようになるということ。

④ 貨幣自体には有用性がないがゆえに、逆に、あらゆるモノの価値を金額としてあらわすことができ、そのため、貨幣はモノを獲得するための困難さを金額として表現しているということ。

⑤ 貨幣は中立的な性格を有しているため、社会に貨幣が入り込むことによって、人びとは生活する場所や職業も自由に選択することができ、他の階級との距離を縮めたり、拡大したりすることができるということ。

問八 本文中の——線6「資本主義の動因の一つのカラクリ」とあるが、筆者は続く「X」の部分で、そのカラクリについて簡潔に述べている。「X」の部分である次の文章の空欄「P」「T」に入る最も適切なものを後の①～⑨からそれぞれ一つずつ選べ。

まず人間の象徴作用のなかから「P」性「が生み出される。すなわち「ポトラッチの原理」である。それが「模倣的競争」を生む。「模倣的競争」はいつその「Q」を必要とする。「Q」によって距離がでると「R」性「が生み出される。すると、「S」なものほますます「R」となり価値が高まる。かくて「T」は膨らむ。この「T」を満たすために、よりいつその「Q」が必要となる。そして「Q」は「所得」を生み出すために生産が拡張される。かくて人は経済成長へと強制される。

- P…13 Q…14 R…15 S…16 T…17
- ① 相互 ② 欲望 ③ 稀少 ④ 欲求 ⑤ 距離 ⑥ 貴重 ⑦ 貨幣 ⑧ 過剰 ⑨ 有用

問九 本文中の——線(ア)～(オ)のカタカナを漢字にしたときと同じ漢字が使われているものを、次の各群の①～⑤からそれぞれ一つ選べ。

- (ア)シヨウニン
- 18
- ① 彼女の行動はシヨウサンに値する。
 ② 部長にシヨウシンする。
 ③ シヨウソウカンにかられる。
 ④ 伝統芸能をケイシヨウする。
 ⑤ あの人はさっぱりとしたキシヨウだ。

- (イ)イシン
- 19
- ① イセイのよい声を上げる。
 ② 心遣いに対してシャイを述べる。
 ③ イライされた仕事を引き受ける。
 ④ イシヨクの新人が現れた。
 ⑤ イケイの念を抱く。

- (ウ)チヨウタツ
- 20
- ① 異変のチヨウコウがみられる。
 ② 洋服をシンチヨウする。
 ③ 売り上げをキチヨウする。
 ④ 社会保障費がボウチヨウを続ける。
 ⑤ 税金をチヨウシユウする。

- (エ)ヨウイ
- 21
- ① 製造プロセスをカンイ化する。
 ② 計画案にイロンを唱える。
 ③ ヨウイ周到に物事を進める。
 ④ 人類はイゼンとして戦争と貧困に苦しんでいる。
 ⑤ 現代社会ではイシヨクが満たされない状況もある。

- (オ)ユウカン
- 22
- ① 自動車産業は日本のキカン産業の一つだ。
 ② 難局にもユウカンに立ち向かう。
 ③ カンセイな住宅街に住んでいる。
 ④ 素晴らしい演奏にカンゲキした。
 ⑤ アンティークの人形をカンテイする。

以下の問題ⅡとⅢは選択問題です。どちらかを解答してください。ⅡとⅢを両方解答した場合は、高得点の方を合否判定に使用します。

〔Ⅱ〕 次の文章を読んで、後の問に答えよ。

嗜好品やドラッグは近代の資本主義の成長と深くかわり、発達してきた。たとえばデヴィッド・T・コトライトによれば、世界各地のさまざまな嗜好品が一気に西洋になだれ込み一般化する「サイコアクティブ革命」が近代には達成された。習慣化しやすいドラッグや嗜好品には、安定した需要が見込める。だからこそ輸入販売業者や密売人はそれを競って販売し、他方で政府はそれを専売化しようと努めてきた。安定した収税がおもむきかかった初期近代国家にとって、嗜好品やドラッグはしばしば貴重な収入源となったのであり、たとえば日本も明治期には自家醸造を禁止し酒税の賦課を強制し、それを日清日露戦争の財源の大きな部分としたのである。

こうして国家や市場に後押しされ、近代において嗜好品やドラッグは純度の強化や、人びとの嗜好に応じた多様化を示していく。文化史家のシヴェルプシュによれば、一八世紀の都市で労働がより負荷の高いものになるのに応じて、アルコール度数の高い蒸留酒であるジンの流行がみられた。同様に一八世紀の日本の都市でも、灘の酒を代表としたより高純度の酒が流行した。祭りの場のように集団で飲まれるわけではなく、個人の嗜好物として孤独に楽しまれていくなかで、より深い酩酊を誘うドラッグに近いものへと酒は変化していったのである。

さらにタバコをヨウイに「消費」できるようにするためのシガレットの発明など、ドラッグを一気に身体に吸収し強烈な快楽や陶酔を求めることを促す「サイコアクティブ」な文化が育っていった。

もちろん、あらゆる嗜好品やドラッグが政府によって許容されたわけではない。スポーツがある種の大衆的なナショナルイズムとむすびつき拡がった一方で、嗜好品やドラッグは国家による監視や取り締まりをしばしば被っていく。コーヒーやお茶、タバコやアルコールなどの嗜好品はたしかに広く受け入れられたが、他方、大麻やマジックマッシュルームなどのソフトドラッグは国家によってしばしば管理され、さらに中毒性・依存性の高いコカインやモルヒネ、LSDなどのいわゆるハードドラッグは国家によって禁じられてきたのである。

その背後には、「健康」に生きることを人びとに強制する権力の稼働がある。どのドラッグを許可し、取り締まるべきかは、究極的にはその時々々の状況によってしか決まらない。たとえば大麻とアルコール、どちらが危険であるかは、状況に応じて複数の回答ができるはずである。だが権力は恣意的に線を引き、その線を人びとが越えないように取り締まってきた。ドラッグはその意味で主体の「健康」が何を意味し、それをいかに実現するかを権力が表明する重要な境界線になってきたのである。こうした権力の動きのなかで、とくに大きな役割を担ったのが医者である。医者はいかなるドラッグや嗜好品に害があり、それを誰が使用でき、誰ができないかを定めるばかりではなく、特定のドラッグや嗜好品の流通を管理し、独占する主体になった。たとえば渡邊拓也は、近代において医者に薬として活用される有用なドラッグこそ強い取り締まりにあったと分析している。効能が強い薬ほど厳格な管理が求められるという常識的な関係がみられただけではなく、「有益」なドラッグを管理し独占的に使用するために、医者は一般人によるドラッグの使用をむしろ制限してきたとされるのである。

この意味でドラッグや嗜好品の近代における流通や消費は、医者を中心とした医療化という権力の発達と深くかわつてきたといえる。ミシェル・フーコーの生権力論や、イヴァン・イリイチの医療化論を前提に、近代国家は成員の生命を管理し健康増大を目指す権力を作動させるとしばしば論じられてきた。医者は、こうした権力の稼働を支えるかなめの位置に座る。医学という専門知を背景として善き生が何で、そのために何を気遣わなければならないかを、医者は個人や集団に向けて指導してきた。ドラッグが禁止され、さらにそれを利用する者が非合理的な選択をする者として道徳的に非難されてきたのは、ひとつにはそのせいである。医者に従わず、薬物をみずからの判断で消費することで、医者が示す「真理」に抵抗し、またそれゆえ国家が打ち立てた秩序に反抗する者として、ドラッグ使用者はしばしば迫害されてきたのである。

このことは、逆にドラッグや嗜好品の使用者が、その使用の経験を医者が近づけない私的な「真理」としてしばしば主張してきたことからも確かめられる。たとえばウイリアム・パロウズはその著名なドラッグ論で、「麻薬は酒やマリファナのような人生の楽しみを増すための手段ではない。麻薬は刺激ではない。麻薬は生き方なのだ」と主張している。こうした見方からすれば、麻薬を主体から切り離し、客観的に語れるとみなす想定そのものがまちがいということになる。麻薬は主体に快楽や刺激をもたらすだけでなく、主体の意識の形式そのものを変え、だからこそ当事者ではないたとえば医者には接近不可能な、私的な「真理」をあきらかにするとされたのである。

しかしドラッグや嗜好品を特権化するこうした見方は、ある意味では医療化を推し進める権力の構図をロマンチックに反映したもの⁵にすぎない。ドラッグが国家や権力に対するアンチテーゼとみなされることで、それらがつくりだす秩序を過大評価し、逆に固定化してしまっている向きがみられるのである。

その意味では医療化と対立させることを急ぐ前に、ドラッグや嗜好品と医学やそれを支える国家との関係の複雑さを、より具体的に解きほぐしていく必要がある。そもそもドラッグや嗜好品を使う者も、たんに医者を無視して、自己破壊的な快楽を求めているわけではない。癒やしや快楽を探索するという意味では、そうした者も医者に対抗しつつも、自分なりの「健康」を手に入れようとしてきたのではあるまいか。だとすればやり方や具体的な定義が異なっていたとしても、彼・彼女たちも医者・医学と同様に医療化の権力に従ってきたといえるのである。

実際、現代社会では、スピリチュアルやホメオパシーといった怪しげなやり方で、医者を疑いながらも、「健康」という目標そのものは受け入れようとする両義的な実践がしばしばくりかえされている。それと同様にドラッグや嗜好品も、医療化にたんに対立するのではなく、むしろ複雑に混じり合い、交差することで独自の消費の場をつくりだしているようにみえるのである。

それを大衆的な規模でよく示すのが、ドラッグストアの近年の驚くべきほどの成長である。一九九〇年代後半より、比較的割安の医療品を中心に、化粧品や日常的な衛生商品、さらに近年では食品や日用雑貨まで揃えるドラッグストアが全国的に拡

大してきた。ドラッグストアのこうした隆盛は、ひとつには市場のデフレ化に呼応している。ドラッグストアは郊外の便利な場所でもより安価な薬や化粧品を取り揃えることによって、街の商店街にあった小規模の医薬品専門店や化粧品専門店を駆逐してきた。南方建明によれば、ドラッグストアは後者のような専門店の売上を奪い発展してきたのである。

ただし商品⁶を安く売ることだけによって、ドラッグストアは人気を集めたわけではない。その成長を後押ししたのは、薬や化粧品、あるいはシャンプーや歯磨き粉など広い意味で個人の「健康」を気遣う日常的な習慣の拡大である。ドラッグストアは、薬だけではなく、シャンプーや歯磨き粉などサニタリー商品の品揃えをとくに充実させてきた。そうした商品の個人あたりの使用が増大したことに加え、日野真克によれば、たとえば一家のなかでも同じシャンプーや歯磨き粉を使わなくなるといった変化が目される。自分の身体に直接用いる身の回りの品々に個々人がこだわりをみせる、社会学的には「個人化」と解される現象が進んでいくなかで、シャンプーなどひとつの商品であれ多様なタイプを揃えるドラッグストアが求められるようになってきたのである。

こうした「個人化」の傾向は、広義のドラッグに対して当てはまるだけではない。近年ドラッグストアでは、お菓子や冷凍食品などの食材も充実しているが、それらはファミリー向けというよりも、単身者や高齢者をおもなターゲットとしている。仕事⁷が忙しく時間のない単身者、またそもそも量を必要としない高齢者世帯では、近隣にはないことが多く、その広さから滞在時間も長くなりがちなスーパーマーケットでの買い物は敬遠される傾向が強い。その代わりに、コンビニに比べれば安く、またスーパーマーケットに比べれば少ない滞在時間で食品を手に入れられるドラッグストアの人氣が高まっているのである。

家族のなかでも個別化されたこうした身体への関心の高まりや、世帯のさらなる縮小傾向を追い風としてドラッグストアは興隆してきた。その意味でドラッグストアの繁栄を支えてきたのは、医者⁷と協同的であるとともに、対抗的でもある私的な消費のゲームの活性化である。たとえばアメリカでは医師による処方を受けずに、ドラッグストアで自分で薬品を買うことが医療の実践として定着し、コロナ禍でもドラッグストアがワクチン接種の拠点になったとされる。日本ではさまざまな政治的事情が絡み、そこまでの展開はみられないものの、医療費の高騰を抑える目的から、近年では市販薬を中心としたセルフメディ

ケーションが期待されているのである。

こうしてドラッグストアは、医者と競争するだけでなく、医者と同じく人びとの「健康」に奉仕しもする複雑なアクターとして医療化に関与してきた。貧困であるために医者に頻繁にかかれぬ者や、医者の治療に満足がいかなぬ者、または医者にかからずいまずぐに効果を手に入れたい者が利用するオルタナティブな「健康」の拠り所としての役割を、ドラッグストアは果たしてきたのである。

この意味でドラッグストアの増加は、現代社会において「医療化」とは別に、薬物を用い自己の身体を管理する「薬物化」といつてもよい実践がますます拡がっていることを照らします。医薬品とよりハードなドラッグのあいだには、合法／違法、自己治療的／自己破壊的といった社会的なちがいがたしかにある。だがこうした差異は、ある意味では「医療化」を推し進める国家の観点から恣意的に設定されているにすぎない。医者の権力に対抗し、あるいはそれをうまくやり過ごし、自己の身体改善とある種の快楽を性急に求めるという意味では医薬品もドラッグも、消費者の側からみれば「薬物化」という同じトレンドのなかで消費されている可能性が高いのである。

(貞包英之『消費社会を問いなおす』による)

(注1) ミシェル・フーコーフランスの哲学者・思想史家(一九二六―一九八四)。構造主義の立場から思想や知の認識論的転換に大きな影響を与えた。著者に『狂気の歴史』『言葉と物』『性の歴史』など。

(注2) イヴァン・イリイチ・オーストリア生まれの思想家(一九二六―二〇〇二)。ラテンアメリカを中心に活動。カトリックの司祭だったが教会と対立し解職、医療や学校制度を中心に産業社会批判・文明批判・エコロジー論を展開した。著者に『脱学校の社会』『脱病院化社会』『シャドウワーク』『ジェンダー』など。

(注3) ウィリアム・バロウズ・アメリカの小説家(一九一四―一九九七)。五〇年代のビート・ジェネレーションを代表する作家の一人。小説に『ジャンキー』『裸のランチ』、他のカットアップ作品に『ソフトマシーン』『ノヴァ急報』など。

(注4) スピリチュアルやホメオパシー・スピリチュアルここでは、医学的な知識でなく、霊的・超自然的な信仰などで、

病を克服しようとする考え方。ホメオパシーは、大量に摂取すると病を引き起こす物質を、少量摂取することで病が治療できるとする考え方。

(注5) セルフメディケーションみずから病や症状を判断して医薬品を使用すること。

問一 次の文章は、本文中の――線1「サイコアクティヴ革命」について説明したものである。この文章を読んで、空欄 a に入る最も適切な語句を、後の各群の①～④からそれぞれ一つずつ選べ。なお、同じ記号の箇所には同じものが入る。

ローカルな薬物文化が一気にグローバル化していったのが、コロンブスの新大陸発見につづく大航海時代です。この時代、a の人々は、コートライトのいう「サイコアクティヴ(精神作用)革命」を経験しました。南米からはカフェインとカカオ(ここにも少量のカフェインが含まれています)が、アメリカ大陸からはタバコが、中近東からはコーヒー、中国からは茶がやってきて、それまでアルコールしか知らなかった a の人々を狂喜させたからです。

植民地政策と奴隷労働が、こうした新しいサイコアクティヴ・サブスタンス(精神作用物質)の生産能力を一気に押し上げました。同時に、それを依存性薬物と分類すべきかどうか議論のあるところですが、やはり植民地での奴隷労働によって大量生産が可能となった「b」の存在が、人々の新しいサイコアクティヴ・サブスタンスの消費を加速させたのでした。そのままでは苦味が強すぎるコーヒー、茶、カカオ、タバコも、b の添加によって絶妙な味わいと口当たりを獲得したからです(意外に知られていませんが、実は、タバコにも味つけに b が使われてきたのです)。帝国主義国家の多くが、植民地で茶、コーヒー、タバコという薬物、そして、薬物というべきかどうかはさておき、「薬物消費触媒」である b を作っては本国に仕入れ、あるいは、他国に売りさばいて巨利を得てきました。

こうした薬物が人々の生活に浸透していくと、あとは勝手に消費が加速していきます。というのも、これらの嗜好品は相互に薬理作用を打ち消しあって、それぞれの消費量を高めるはたらかがあるからです。コーヒーや茶、カカオ(チョコレート)に **b** を添加することによってカフェインの消費量は増えますし、タバコはカフェインの代謝を早めるので、これもまたカフェインの消費を促進します。そして、カフェインの摂り過ぎで興奮した脳を冷却して眠りにつくには、大量のアルコールが必要となり、さらに翌朝、二日酔いのほんやりした脳を **c** ためにカフェインが必要となる……。まさに「**d**」のアデイクション(依存症・ビジネス)です。

(松本俊彦『身近な薬物のはなし』による。ただし一部変更した。)

- | | | | | | | | | | |
|---|---|---|------|---|-------|---|--------|---|-------|
| a | 1 | ① | ロシア | ② | 東南アジア | ③ | 北アフリカ | ④ | ヨーロッパ |
| b | 2 | ① | 砂糖 | ② | 塩 | ③ | 胡椒 | ④ | 唐辛子 |
| c | 3 | ① | 眠らせる | ② | 酷使する | ③ | 覚醒させる | ④ | 疲れさせる |
| d | 4 | ① | 鬼に金棒 | ② | 濡れ手に粟 | ③ | 馬子にも衣裳 | ④ | 瓢箪から駒 |

問二 本文中の——線2「権力は恣意的に線を引き、その線の人びとが越えないように取り締まってきた」とあるが、その具体的な事例として最も適切なものを、次の①～⑤から一つ選べ。 **5**

- ① かつて農業資源や薬用植物として日常的に活用されていた大麻は、その長い歴史的背景と地域文化との深い結びつきから、単なる植物以上の意味を持っていた。そのため、文化伝統の保護という観点においても、大麻の使用は引き続き容認され、法律上も一定の特例が設けられることとなった。
- ② 大麻よりもアルコールやタバコの方が健康への悪影響が大きいとする科学的報告を発表した政府の薬物委員会の専門家がいたが、その見解の科学的根拠が不十分という理由で解任された。この出来事は、政府が科学的証拠をもって大麻使用を禁止した事例となった。
- ③ 大麻に対する世論を形成する上で、メディアと政治家は人種的偏見を利用し、特定の民族や社会集団と大麻の使用を結びつけることで、その薬物を「危険ドラッグ」として広く社会に印象づけ、禁止した。このようなレッテル貼りは、科学的根拠に基づかない感情的な反応を呼び起こし、恐怖と差別を助長し、権力による取り締まりを後押しする世論を形成した。
- ④ ヘロインやコカインといった強力な依存性と急性毒性を持つ薬物が厳しく規制されている一方で、タバコやアルコールといった嗜好品が合法で広く流通しているのは、それぞれの物質の健康への影響や社会的被害に関する評価に基づいている。
- ⑤ ある種の先進国は、自国内においては文化的・宗教的な理由からタバコやアルコールの嗜好品としての使用を厳しく制限または禁止し、国際的な場面では他国に対しても、一貫性のある厳格な規制の導入を強く求める姿勢を見せている。

問三

本文中の——線3「医療化」とあるが、ここで言う「医療化」の具体的な事例として本文の主旨に合致しないものを、次の①～⑤から一つ選べ。 6

① 学校に行かない子どもたちは、かつて単なる欠席だったが、ある時期から、「登校拒否」という名のもとで扱われ、その行動は学校や家庭の問題としてだけでなく、精神的な障害や病理とみなされることになった。そのため、教育の現場ではなく医療の領域で対処すべきものとされ、カウンセリングや投薬を含む治療の対象にされるのが一般的であった。

② 教室内でじっと座ってられない、話を聞き続けられないといった子どもの行動は、かつては家庭でのしつけの不足や性格の問題と考えられていた。しかし、近年ではこうした行動が発達障害に起因する可能性があると考え、教育ではなく医学の領域で対応する動きが強まり、診断や薬物治療を受ける子どもも増えている。

③ アルコールをやめられない状態は、以前は個人の意思の弱さや墮落、道徳的失敗とされ、非難や恥の対象となっていた。しかし、現代ではそれが「依存症」という医学的な概念で理解されるようになり、心理療法や薬物治療、リハビリ施設などを通じて、専門的な管理と支援のもとに回復を目指す取り組みが広がっている。

④ 人間の身体に起こる年齢的な変化である更年期は、長らく自然なライフサイクルの一部と考えられてきたが、近年ではその時期に生じる不調がホルモンの「異常」と見なされるようになり、医療機関での診断やホルモン補充療法などの治療対象となっている。これにより、加齢にともなう身体的・精神的変化が病気として扱われる傾向が強まっている。

⑤ 近代化とともに医療機関での管理が進められてきた出産は、長い間病院や産院で医師や助産師の監視下に置かれるのが一般的だったが、近年では出産をより自然で主体的な経験と捉える動きが強まり、家庭的な環境での出産、つまり妊婦の自宅での出産を選ぶ人が先進国の一部で増えている。これは身体本来の力を尊重しようとする考え方の反映でもある。

問四

本文中の——線4「医学という専門知」とあるが、この段落の前後でこれと似たような意味で使われている言葉は、本文中の……線a～eのうちどれか。次の①～⑤から一つ選べ。 7

① a…非合理的な選択

② b…医者が示す「真理」

③ c…秩序に反抗する者

④ d…麻薬は生き方

⑤ e…主体の意識の形式

問五 本文中の——線5「ドラッグや嗜好品を特権化するこうした見方は、ある意味では医療化を推し進める権力の構図をロマンチックに反転したものにすぎない」とあるが、それはなぜ「ロマンチックに反転したもの」といえるのか。その理由として最も適切なものを、次の①～⑤から一つ選べ。

8

① 一部のドラッグや嗜好品が国家に禁止・管理されている状況は、それ自体が社会における不平等や階層的な支配構造の象徴となっており、こうした扱いに対して批判的な立場をとる人々には、ドラッグは既存の権力に対抗する象徴的な抵抗の手段や根拠として機能する。その結果、ドラッグの特権化は、何が健康かを線引きする権力の行使をかえって強化するから。

② アルコールには強い依存性があり、健康被害のみならず、家庭内暴力や交通事故、労働効率の低下といった深刻な社会的問題を引き起こす可能性がある。だが、歴史的に禁られてきた伝統的な飲酒文化や、酒類産業がもたらす膨大な経済的利益を理由に、多くの国では法的に認められ、日常生活の中でも広く受け入れられている現実があるから。

③ タバコに含まれるニコチンなどの有害物質は明確に発がん性を持ち、長期的な喫煙による健康被害は医療統計でも広く証明されている。だが、タバコ産業は多くの国で合法的に運営され、国内経済でも税収の確保や雇用の創出といった重要な役割を担うため、厳しい規制が導入されにくく、その存在がある種の経済的特権として維持されているから。

④ カフェインはコーヒーなどに含まれ、中枢神経を刺激して注意力や覚醒度を一時的に高める効果を持つ一方で、過剰な摂取は睡眠障害や心拍数の上昇、さらには心理的な依存を引き起こす可能性がある。それでもなお、現代社会では仕事や学業の効率を高める手段として広く日常的に消費されており、一種の文化的慣習として深く根付いているから。

⑤ アルコール飲料は、その銘柄や産地、希少性、熟成の度合いによって大きく価値づけが異なり、特に高級ワインや希少なウイスキーなどは、単なる嗜好品としてではなく、歴史的・文化的な「芸術品」や「文化財」として扱われることがある。またそれらはしばしば投資対象にもなり、その消費や所持は個人の社会的地位や経済的余裕を象徴するものとして機能するから。

問六 本文中の——線6「商品を安く売ることだけによって、ドラッグストアは人気を集めたわけではない」とあるが、本文中で指摘される、ドラッグストアが人気を集めた他の理由を説明した次のア～オのうち適切なものには①を、適切でないものには②を、それぞれマークせよ。

ア ドラッグや嗜好品が、医療化に単に対立するのではなく、むしろ複雑に独自の消費の場をつくりだしてきたため。

9

イ 郊外の便利な場所での出店して、街の商店街にあった小規模の医薬品専門店や化粧品専門店を駆逐してきたため。

10

ウ 個人の「健康」を気遣う日常的な習慣の拡大を受けて、薬だけではなくサニタリー商品の品揃えも充実させたため。

11

エ 自分の身体に直接用いる身の回りの品々にこだわりをみせる現象が進んでいくなかで、ひとつの商品であれ多様なタイプを揃えるドラッグストアが求められるようになってきたため。

12

オ ファミリー向けよりも単身者や高齢者をおもなターゲットとして、コンビニより価格が高く、スーパーより買い物に時間がかかる店づくりを目指したため。

13

問七

本文中の——線7「医者と協同的であるとともに、対抗的でもある私的な消費のゲームの活性化」とあるが、その具体例として最も適切なものを、次の①～⑤から一つ選べ。14

- ① 歯磨き粉は家族全員が共同で使う日用品として、一つの大容量タイプを購入し、それを家庭内で共有するという習慣が根付くことで、個人の選択とは関係なく全体的な家計消費を抑える。
- ② お菓子や冷凍食品といった日常的な軽食類を、スーパーマーケットではなく、あえて価格が安く、手軽に手に入るドラッグストアで購入することで、日常生活のコストを抑える工夫をする。
- ③ 自分自身の病状や治療法については特に深く考えたり調べたりせず、基本的には医師の判断と処方に全面的に委ね、出された薬は医師の指示どおりにきちんと服用する。
- ④ 病院での診察や投薬といった通常の医療行為に対して納得がいかず、あえて医療機関との関係を避け、ドラッグストアを利用するなどして、自分の判断で医療に依存しない生活スタイルを選ぶ。
- ⑤ 一人暮らしの人や年金で生活している高齢者などが、自分の限られた収入や社会的立場に合わせて、処方薬と似た効果の市販薬を求め、経済的な負担を減らすように工夫した消費行動をとる。

問八

次のア～カのうち、本文で述べられている内容に合致するものには①を、合致しないものには②を、それぞれマークせよ。

- ア 一八世紀の日本では灘の酒を代表としたより高純度の酒が流行し、神社の祭祀の場のような集団だけでなく個人の嗜好物として楽しまれていくなかで、より深く酔えるものに変化していった。15
- イ 国家／医者は、どのようなドラッグや嗜好品に害があり、それを誰が使用できるかについて定めるだけでなく、特定のドラッグや嗜好品の流通を管理し、独占する主体になった。16
- ウ 医者は、医学という専門的な知識を背景に、人びとに対してあるべき生を示すことで、ドラッグ使用という非合理的な選択をして道徳的に批判される人びとを擁護してきた。17
- エ ドラッグや嗜好品を使う者は、たんに自己破壊的な快楽を求めたわけではなく、癒やしや快楽を探求しながら、独自の健康を手に入れようとしてきた。18
- オ ドラッグストアが隆盛したのは、街の商店街の小規模の医薬品専門店や化粧品専門店と共存しながら、個人が健康を気遣う日常的な習慣が拡大することで、そのような商品を選好する時勢にのつたためである。19
- カ 一般の医薬品とハードドラッグの境界はあいまいだが、消費者の選択の仕方には一定の違いがあり、「薬物化」というトレンドのなかでそれらの上下関係が位置づけられている。20

〔Ⅲ〕を解答する場合には、必ず解答用紙(マークシート)の〔Ⅲ〕に記入してください。
誤って解答用紙の〔Ⅱ〕に記入した場合には、0点となるので注意してください。

〔Ⅲ〕 西住聖人と西行が難波に立ち寄った時の様子を記した次の文章を読んで、後の問に答えよ。

過ぬる八月のはじめつかた、西山の西住聖人と伴て、難波の渡を過ぎ侍りしに、折ふし日ことにうららかにて、風もたち侍らねば釣ふね浪にかかびて、木のはのごとくに見ゆ。「いかに多くの魚つるらん。あら無慙や。いざや、此舟にのりて、彼魚の為に念仏して、後世とはん」といへば、「げに然るべし」とて、遠あさ遙に歩みよりて、「舟にのせ給へ」といふ。「是は釣舟にて外へ行べきにあらず。乗給ひて何の用か侍らん」といふ。あながちにひて侍り。又さて、魚のためにひそかに念仏して、後世を訪侍りき。かしここの浦によりて、釣するを見侍りしかば、なにとなく、

難波人いかなる江にかくちはてん

とうちすさみ侍るを、此西住聖人つけんとてかほ杖つきて、うちうめきけるに、釣する翁のこの外にとしたけたるが、とりあへず、

あふことなみに身をしづめつつ

とつけたるに、めづらかに覚て、舟にかしこくしひて侍りて、かかる覚えぬ事聞ぬる嬉しさよと思ふ事、喩へんかたなし。此翁も、いまはひたすら釣をやめて、連歌に心を入侍り。翁の句おもしろく侍りしかば、又思ひよりしは、

舟のうち浪の下にぞおひにける

といひたるに、又うちあんで、

あまのしわざもいとまなの世や

と詠じ侍りき。

互に詠じ侍りし程に、日も西の山のはにかたぶきぬれば、あまのとまやにこぎもどして、いまはいづちへも行べきよし、翁にいとまをこひ侍りしかば、「暮ぬ」と、あながちにとどめしかば、彼翁のすみ家にやどりて、昔今の物語し侍りき。翁のいふやう、「我は山影の中納言とかや申侍りける人のすゑに侍りけり。父にてありし人は、東山の辺にすみ侍りけるが、世中しわびて、此島に落留て、浦人の腹に我をうませて侍りける。我三と申ける年、父母ともにはかなくなり侍りき。其後は、母方のうばなりし人に相かかりて侍りしが、十二といふに、又彼にもをくれて侍りしかば、何とて今更世中をふべきとも覚えて侍りしかども、魚をひきて命をつぐに侍り。うき世中のすみうさに、かみをろして、いかならん所にも侍らばやと思ひ侍るも、さすがに捨てて、ただ身一を助けんとして、おほくの物の命をたつ事の心うさ。今も、もとどりきらんと思ひ侍る事、一日に必二度三度は思ひ出て、涙のこぼるるなり。そのおりしも、父の具足の中に、何となき歌どもかきをき侍るを見て、心をなぐさむるに侍り。妻子といふ物もなく、すでに五十年あまりの年を送り侍りき。各々の有様を見奉るに、殊にうらやましく侍り。我もともなひ奉らんとして、やがて手づからもとどりきりて、我が年ごろのすみ家をば、日ごろしたしかりける人になんたらせて、いざなひつれて行住と名付て、むらなき後世者にて侍りき。

其後都にのぼりて、西山のふもとにいほり結て行ひ侍りけり。西山聖人と聞侍りしは、此人の事にて侍りき。ゆゆしく行ひなりて、聖人とあおがれ給へり。実には、其しなをいはば、下れる人に侍らねども、あまのとまやに生れていねもせで、うしほをくみて是を焼き、みるめをかりて身を助け網を引て命をいきて、五旬のよはひをへにける人の、俄に発心し侍る、いとありがたき事には侍らずや。

年へて都にまかり上侍りし次に、彼いほりに尋行て侍れば、山かげの清水きよくながれて、前は野のはるばるとあるに、四壁も侍らで、蘭荊には野干ふしどをしめ、松葉には梟なける所に虫の音をともし、鹿をしたしみ契り侍り。庵うつくしく結びて、座禅の床にしづまり給へり。見るに貴く侍り。彼聖の申されしは、「その御故に、かかる身となり、現世後世、心のままにしおほせ侍れば、返々もうれしく侍り。此恩をば、争か報じ侍ら

X

んなれば、いそぎ得脱し侍りてとこそ

おもへ」とぞのたまはせし。此聖も、いとけなかり Y より、無常を心にかけて給へりとぞ承はる。弟子にて有ける僧の、「何事か後世の為にはよく侍る」とひ奉りけるに、「心をどめて無常を觀ぜよ」とこそそのたまはせ Z。

(『撰集抄』による)

(注1) 西住聖人―俗名源季政(生没年未詳)。歌人。西行とほぼ同時期に出家し、同行者として親しい交わりをしていた。

(注2) 山影の中納言―藤原山蔭(八二四―八八八)。藤原高房の子。京都吉田神社や摂津総持寺を創建。

(注3) 蘭荊―ふじばかまといばら。転じて草々の生えた野。

(注4) 野干―きつね。

問一 本文中の||線 a~c の意味として最も適切なものを、次の各群の①~⑤からそれぞれ一つずつ選べ。

すさみ 1 ① 気ままに歌って ② 気力が衰えて ③ 釣人をもてはやして ④ 気持ちが荒れて

⑤ 釣人を遠ざけて

うめき 2 ① うなあって ② 苦吟して ③ ため息をついて ④ 飽きて ⑤ 埋めて

あま 3 ① 尼 ② 女 ③ 雨 ④ 海女 ⑤ 漁夫

問二 本文中の―線 1~5 のうち、翁が主語となるものには①を、それ以外が主語となるものには②をそれぞれマークせよ。

見侍り 4

つけたる 5

おもしろく侍り 6

詠じ侍りき 7

あながちにとどめ 8

問三 本文中の―線ア「乗給ひて何の用か侍らん」と舟に乗った人物(翁)が言った理由として最も適切なものを、次の①~⑤から一つ選べ。 9

① 引き潮で動けない舟なので、西住聖人たちが別の場所へ行くことができないから。

② 引き潮で動けない舟なので、西住聖人たちが多くの魚に念仏を届けることができないから。

③ 外海に出ない釣り舟なので、西住聖人たちが別の場所へ行くことができないから。

④ 外海に出ない釣り舟なので、西住聖人たちが多くの魚を釣ることができないから。

⑤ 外海に出ない釣り舟なので、西住聖人たちが多くの魚に念仏を届けることができないから。

問四 本文中の―線イ「かかる覚えぬ事聞ぬる嬉しさよと思ふ」とあるが、その理由として最も適切なものを、次の①~⑤から一つ選べ。 10

① 舟に運良く乗れた上に、思いがけなく珍しい下の句を聞くことができたから。

② 釣りをしていた翁が、思いがけなく見事な下の句を付けたから。

③ 釣りをしていた翁が、西住聖人よりも下の句を覚えていたから。

④ 舟を上手に操る翁が、暗記の難しいこの歌を覚えられていたから。

⑤ 舟に運良く乗れた上に、話を聞いていないと思っていた翁が下の句を付けたから。

問五 本文中の……線P～Tのうち、「翁」と同一人物はだれか。次の①～⑤から二つ選べ。なお、解答の順序は問わない。

- 11 12
- ① 山影の中納言
P
② 浦人
Q
③ 行住
R
④ 五旬のよはひをへにける人
S
⑤ 弟子にて有ける僧
T

問六 本文中の——線ウ「何とて今更世中をふべきとも覚えで」における翁の心情の説明として最も適切なものを、次の①～⑤から一つ選べ。13

- ① 血縁者が皆亡くなってしまったので、背負うべき責任がなくなり、自由を満喫しようとする気持ち。
② 母方のうばに見捨てられたので、誰も頼れず、自暴自棄になる気持ち。
③ 母方のうばに見捨てられたので、どうやって頼る人に会ったらよいかわからず、呆然とする気持ち。
④ 血縁者が皆亡くなってしまったので、これ以上は生きる意味を見出せないという憔悴しょうたいしきった気持ち。
⑤ 血縁者が皆亡くなってしまったので、悲しみにじつと堪えていこうと決意する気持ち。

問七 本文中の空欄 X Y Z に入る最も適切なものを、次の①～⑨から一つずつ選べ。ただし、一つの選択肢は一度しか使えない。

- X 14 Y 15 Z 16
- ① つ ② ず ③ つれ ④ り ⑤ なり ⑥ ざら ⑦ ける ⑧ けり ⑨ ぬ

問八 次の(1)～(5)のうち、本文の内容に合致するものには①を、合致しないものには②をそれぞれマークせよ。

- (1) 翁は母方のうばを養おうとして、気が乗らないながらも、多くの殺生を行っていた。 17
(2) 西住聖人たちは、多くの魚を釣って殺生をする翁のために、ひそかに念仏を唱えた。 18
(3) 翁は西住聖人たちに出会ったその日に髪を切り、その後仏道に入るために名前を改めた。 19
(4) 翁が和歌の知識を得たのは、具足の中にあつた父親の遺品からである。 20
(5) 翁は歌を縁として出家をすることができたため、歌の心を忘れないように風流な庵を京に結んだ。 21

問九 次の文中の空欄 U V に入る最も適切な語句を、後の各群の①～⑤から一つずつ選べ。

『撰集抄』は西行作に仮託して鎌倉時代後期に成立した U であり、本文中には観阿弥の作である謡曲「江口」の題材となつた西行と江口の遊女との歌問答が記されている。西行はもと V の北面の武士であつたが、歌にも秀でており、『新古今和歌集』にも九四首の歌が選ばれている。このほか、第七番目の勅撰和歌集であり藤原俊成が撰者となつた W にも一八首選ばれている。

- U 22 ① 紀行文 ② 歌物語 ③ 随筆 ④ 仏教説話集 ⑤ 御伽草子
V 23 ① 嵯峨上皇 ② 白河上皇 ③ 後白河上皇 ④ 鳥羽上皇 ⑤ 後鳥羽上皇
W 24 ① 古今和歌集 ② 後拾遺和歌集 ③ 金葉和歌集 ④ 千載和歌集 ⑤ 玉葉和歌集